

呼吸によって放たれる光－素材を裂くこと－

1320909 美術研究科 彫刻領域 植松美月

本論文では、自身の呼吸によって目に見ることができないエネルギーを、“光”として彫刻表現することをテーマとしている。その手段として、素材を“裂く”ことを連続して行う自身の制作過程から考察する。

目に見ることができないエネルギーを実在化させることへの関心は、私自身の身体が発する熱と、その境界について考えたことがきっかけであった。実際に素材に触れながら、触覚と視覚で確認し、実感を得たことが、私の作品制作の原点である。目に見ることができないものはエネルギーを発しており、それを光として彫刻表現することは視覚として確認できることである。

“裂く”ことは、最も原始的な行為である切断することだが、自身の呼吸が風となって触れ、素材を切り裂き、目に見ることができないエネルギーを光として開示する手段として、これを選択した。私の彫刻は、素材を裂くこと（＝呼吸）によって放たれる光そのものである。

本論文は序章、3つの章、終章で構成されている。

序章では、私が幼少期から持ち続けている不安感から、自分自身の存在とそれを取り巻く目に見ることのできないものに対して、疑問を持つきっかけとなった事象について説明する。そして、周囲との時間の流れが異なる違和感や、それによって景色が遅く、遠くに見える感覚を持つようになった。

私はその過程から、自身の呼吸が風となって素材と目に見ることができないものとの境界に触れ、切り開くことでそこから放たれる光を実在化させることが、自身にとっての彫刻であると考えようになった。それを実在化させるために、長い時間をかけて素材を裂き続けることは、私自身が“存在すること”への疑問を投げ続けることでもあった。

第1章では、制作動機の根本にある実感と、実感を得た事例と方法について述べた。当初は、私自身の呼吸が風となって、目に見ることができないものとの境界に触れることで、実感を得ることができると考えた。他者が認識する自分が本当に存在しているのかという疑問は、鏡を見ながら視覚として認識するだけでなく、自身の手で触覚として確認することが重要であった。しかし、その過程で、自分自身が呼吸を止めることによって自身の身体を止めることができない事に気づき、その呼吸を、実際に触れることができる素材

を介して可視化することを考えた。それが作品として完成することは、私自身が生きていく時間を切り取ることである。それを実感とし得る方法について述べた。

第2章では、鉄という素材を選択して用いた作品から、自身の実感を視覚化するためには、自身が長い時間をかけて鉄を切断する時間が必要であることと、その状態変化について考察した。

それは溶断面から雨の景色を見出すことであり、作品が完成することは、遠くにあった景色が手に届く距離に現れる感覚であった。そしてそれまでの制作工程から、裂く行為へと変化することで、それまで雨を降らせていると感じていた感覚が、集まって一本の川となる気づきを得た。それは今までになかった呼吸の距離を測る具体的な対象として、“川”が出現したことであり、修了作品《光の川》の制作を経て、裂くことで、鉄という素材が実際の重量より、量感を大きく見せる印象を生み出していると感じた。ここから鉄が放つ光のエネルギーと量感を表現したいと考えようになったことや、偶然目にした積み重ねられたコピー用紙の束をきっかけに、以後、紙を素材として使用するようになったことを述べた。

第3章では、そこから始まった紙を用いた作品制作と、博士提出作品について述べた。初めて紙を素材として用いた《川－稲穂の音－》の制作過程では、コピー用紙に水を含ませ、乾かすことで、紙にうねりを持たせた。私はその状態変化に、霞の景色を見出した。それは、第1章で触れたノートに記録したことと、鉄と紙それぞれの比較から、紙を裂き連ねることが、鉄を切断してできる断面をより細分化したもののよう感じたことがきっかけであった。同時に、鉄の溶断で得た雨の感覚も細分化された。この時、裂くことは自身の呼吸そのものであり、その断面は目に見ることのできない熱や湿気を帯びているように感じた。霞もまた、この熱や湿気を帯びた目に見ることができないエネルギーであり、その過程で、紙が持つ“白さ”への新たな疑問が浮かび、博士提出作品を制作する上での課題となった。博士提出作品については、より厚みがあり、水を多く含むことができる水彩紙を使用していることと、それを裂いた断面に現れる白について考察した。

終章では、本論文のまとめと今後の展望について言及し、結びとした。